

神奈川県山北町における元禄地震(1703)と富士山宝永噴火(1707)による土砂災害  
の分布とその復興過程 —神奈川県山北町皆瀬川地区を例として—

日本工営株式会社 井上 公夫

1 はじめに

平成 13 年度より開始された富士山ハザードマップ委員会では、富士山宝永噴火(1707)の状況とその後の土砂災害についても調査され、内閣府のホームページや関連の学会などで成果が報告されている(小山ほか,2001, 小山ほか,2002, 小山・松尾・井上,2003, 南ほか,2002, 井上ほか,2002, 角谷ほか,2003, 富士砂防事務所,2003)。その後、神奈川県山北町は平成 15 年(2003) 3 月 29 日に、山北町史、史料編・近世を刊行したが、近世の山北町の状況が村・小名単位で詳細に記載され、被災状況とその後の復興過程がかなり明らかになった。中でも山北町皆瀬川地区(旧皆瀬川村)は、宝永の焼砂の分布軸に位置し、層厚 60~70cm も降下・堆積した。ここでは、4 年前の元禄地震(1703)による激甚な被災状況を含めて、連続して発生した地震・噴火災害に対する地域住民の復興努力の一端を紹介する(番号・頁は史料編・近世の記載頁を示す)。

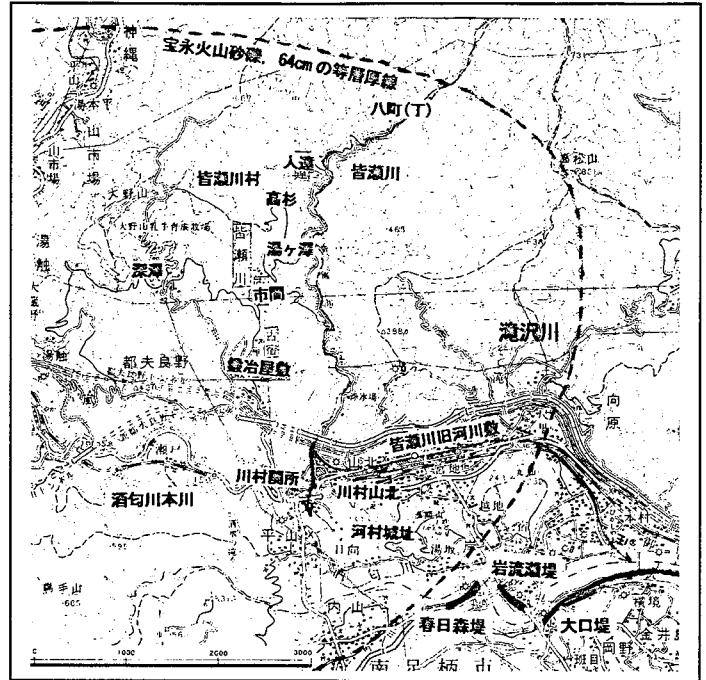


図-1 調査位置案内図(1/5万, 秦野図幅)

2 皆瀬川村(相模国足柄上郡中筋)の動静

天保十年(1839)の『新撰相模国風土記稿』(No.2, p.73-80)では、皆瀬川村の民戸は94軒で、村内に7村の小名(鍛冶屋敷(本村)・深澤・市間・湯ヶ澤・高杉・八町(丁)・人遠)があり、神社・仏閣等の地理情報が詳しく記載されている。万治三年(1660)三月十六日の検地帳(No.40, p.342-349)には、個人別の山畑面積が小名毎に記載されている。

山畑計 8.9町:鍛冶屋敷 1.7町,中尾 0.6町,深澤 1.0町,高杉 0.5町,市間 1.4町,湯ヶ澤 2.2町,人遠 1.0町,八町 0.2町  
寛文十年(1670)九月十八日の馬書上げ帳(No.50, p.402-404)には、馬 57 疋の所有者名がすべて記載されている。

延宝九年(1681)一月二十一日の飢人書上帳(No.57, p.409-412)には、飢人の名前・家族構成が記載されている。

本百姓 5 軒 15 人, 無田 4 軒 7 人, 延宝年間は凶作が多かった。特に、延宝七・八年(1679・80)の被害は大きい。

上記の飢人には、一月二十一日から 15 日間、1 日に男 2 合,女 1 合の救い米の貸出しが与えられた。

貞享三年(1686)四月の皆瀬川村指出帳(No.3, p.201-205)には、村の田畑の状況、特産物等が詳しく記載されている。

名主:市右衛門, 組頭:仁左衛門, 茂右衛門, 次右衛門, 八兵衛, 徳左衛門, 与惣右衛門

惣百姓代:四郎左衛門, 伝左衛門, 民戸 58 軒:名主 1 軒, 組頭 7 軒, 本百姓 40 軒, 無田 10 軒

人口 540 人:男 274 人,女 266 人,馬 48 疋, 高:116.9 石(内 0.2 石,年々川成永荒)耕地:田 0.6 町,畑 27.4 町,山畑 8.9 町

3 元禄十六年(1703)十一月二十二日 元禄地震(M8.2)・全体の死者不明 6700 人,被災戸数 28,000 戸(宇佐美,2003)

元禄十六年(1703)十一月二十八日の地震の潰家帳(No.181, p.547-550)には、個人別の被災状況が記載されている。

潰家 58 軒:名主 1 軒, 組頭 4 軒, 小百姓 31 軒, 無田 22 軒, 家屋数共無 7 軒, 家つぶれ 50 軒

鍛冶屋敷 15 軒:家屋数共無 2 軒(名主市右衛門), 家つぶれ 13 軒(組頭仁左衛門), 深澤 12 軒:家屋数共無 0 軒, 家つぶれ 12 軒(組頭弥右衛門), 市間 8 軒:家つぶれ 8 軒, 高杉 11 軒:家屋数共無 3 軒, 家つぶれ 8 軒(組頭八兵衛),

人遠 7 軒:家屋数共無 1 軒,家つぶれ 6 軒(組頭弥五左衛門), 八丁 4 軒:家屋数共無 1 軒, 家つぶれ 3 軒

宝永四年(1707)十一月四日の他領・自領へ出た奉公人(No.192, p.577-581)には、名前・年齢・状況が記載されている。

惣人数 43 人:江戸奉公 2 人,他領奉公 1 人,御家中水汲奉公 1 人,小田原借屋仕 7 人,小田原奉公 5 人,御領奉公人 27 人

宝永四年(1707)十月四日に発生した宝永東海地震(M8.4)の被害記録は、史料編・近世には記載されていない。

4 宝永四年(1707)十一月二十三日~十二月八日 富士山宝永噴火で 16 日間,火山砂礫が降り続いた。

宝永四年(1707)十二月六日の砂降り被害の書上げ(No.194, p.582-583) 被災家数 12 軒:小百姓 7 軒, 無田 5 軒

宝永四年(1707)十二月十一日の炭運送路変更願い(No.197, p.584-585) 枝郷の市間,湯ヶ澤,高杉,人遠,八町から川村関所への道が不通になったので,川村山北へ直接抜ける道で炭を搬出させて欲しいという嘆願書である。

宝永四年(1707)十二月十四日の藩役人・大西角之右衛門の砂降り被害見分の触れ(No.198, p.585)は、翌日(十五日)に小田原藩の役人が砂の深さ・飢人・つぶれ家・うずもれ家の調査をするので、調査に協力するようという通知である。

宝永五年(1708)二月十五日の皆瀬川村指出帳下書(No.4, p.206-209)には、小名毎の被災状況が記載されている。

名主：市右衛門(鍛冶屋敷)、組頭：仁左衛門(鍛冶屋敷)、茂右衛門、八兵衛(高杉)、弥五左衛門(人遠)、与惣右衛門、弥右衛門(深澤)、惣百姓代：伊兵衛、伝左衛門

民戸 80 軒：名主 1 軒、組頭 6 軒、小百姓 42 軒、無田 31 軒、人口 631 人：男 319 人、女 312 人、馬 82 疋、村筒 5 人  
高：116.8 石(内 16.6 石、年々川成永引) 耕地：田畑計 24.7 町、山畑 8.6 町

宝永六年(1709)七月十一日の皆瀬川村の飢人に扶持米が渡される(No.241, p.685-692)には、小名毎に名前・家族人数が記載されている。飢人 390 人に扶持米 39 石(1 人付米 1 合を 10 日間)が渡された。

宝永六年(1709)十一月九日(p.694-711)、伊勢国津藩(藤堂氏)の手伝いで、皆瀬川の堀割(瀬替)が行なわれている。

宝永七年(1710)八月 川村山北が皆瀬川の堀割工事完成に伴い、皆瀬川旧河川敷を配分する(No.248, p.701-711)。

享保十二年(1727)二月二十三日の皆瀬川村鏡帳(No.5, p.209-212)には、焼砂の流出被害が克明に記載されている。

名主：市右衛門、組頭：仁左衛門、茂右衛門、八兵衛、弥五左衛門、伊兵衛、弥右衛門、惣百姓代：市郎左衛門  
民戸 86 軒(百姓家)、堂 4 軒、人口 532 人：男 280 人、女 252 人、馬 40 疋、村筒 5 人

高：125.5 石(内 35.7 石 年々川成川欠山崩亥砂埋無開発)、

耕地：田 0.6 町(年々川成川欠凡無開発)、畑 36.7 町(内 8.6 町、新畑石盛)、(10.5 町、年々川成川欠山崩亥砂埋無開発)  
元文三年(1738)二月の皆瀬川村鏡帳下書(No.6, p.212-215)では、焼砂の流出による被害が続いていることがわかる。

名主：市右衛門、組頭：仁左衛門、茂右衛門、八兵衛、弥五左衛門、伊兵衛、弥右衛門、惣百姓代：市郎左衛門  
民戸 82 軒(百姓家)、堂 4 軒、道心 1 軒、人口 525 人：男 278 人、女 241 人、馬 42 疋、獵師鉄砲 9 挺

高：116.9 石(内 32.4 石、年々川成山崩亥砂埋無開発)、耕地：田畑計 28.0 町、田 0.7 町(0.4 町、年々川成川欠凡無開発)  
畑 27.5 町(7.4 町、年々川成山崩亥砂埋無開発)、新田石盛 8.6 町(3.7 町、年々亥砂埋無開発)

## 5 山北町河村向原、滝沢川の滝不動での被災と復興

元文三年(1738)二月の「滝不動之縁起」(278, p.753-756)によれば、元龜二年(1571)に熊野法師・了海が大聖庵に住み石不動を刻んだ。元禄十六年(1703)の大地震で庵室が大きく破損した。宝永四年(1707)の富士山噴火で焼砂降り、砂深く万民困窮した。享保十九年(1734)の大水で、四方山の砂一時に流れ出て、沢埋り滝も平地となり、庵室も埋り終に亦無住の地となった。了海が建立した石不動も土中に埋ってしまった。元文元年(1736)に宗福寺の僧が滝沢川に入って、砂を掘り、水を流し、終に不動尊を掘り出したという。そして、元の場所に安置してからは、靈験日々新たになった。

## 6 宝永噴火で埋もれ、天地返して復興したみかん畑の発掘調査(河村城址)

山北町教育委員会では、「河村城址史跡整備マスタープラン(基本構想)」に基づき、河村城址の現況遺構と古絵図との関係を明らかにするため、平成 15 年 7 月よりトレンチ発掘調査を実施している。平成 15 年 12 月 17 日に行なわれた山北町地方史研究会による安藤文一氏の講演「河村城址発掘調査速報—南北朝から戦国時代の河村城を探る—」と現地調査の結果を報告する。河村城址は、南側を流れる酒匂川と北側の山北町の市街地に挟まれた丘陵地で、中世には河村城が築かれていたが、宝永の頃には河村城は廃止され、畑かみかん畑となっていた。この上に、富士山宝永噴火で 60-70cm にも達する焼砂・火山砂礫が堆積し、耕作不能の地となった。自然堆積の場所では、耕作土・黒土の上に、数 cm の白い軽石層(最初の噴火で噴出)の上に、黒いスコリア質の火山砂礫が 60-70cm も堆積している。

しかし、被災民の叡智には驚かざるを得ない。60-70cm にも達する焼砂と耕作土を天地返ししている。古文書で天地返しという文字は見えていたが、実際に見たのは初めてである。機械力のない時代に人力だけで 1m 以上の掘削をし、下の耕作土・黒土と焼砂を天地返しして、畑を復元するという智慧の発想がすごい。大変な労力と時間がかかったと思う。

## 7 むすび

上記のように、地震災害と火山災害は連続して発生し、大規模土砂移動も同時多発的に起きることがある。山北町の事例は典型的な事例であろう。このような災害に対しても、地域住民は逞しく復興の努力をしている。

浅間山天明噴火(1783)で降灰した群馬県の発掘調査で、起き返した畑の畝が見事に復元された遺跡を見学したことはあるが、厚くても 10 数 cm 程度であった。このような手法は 50cm 以上も火山砂礫が堆積し、耕作不能となった地区での耕作地の復元に役立つであろう。現在なら、多数の建設機材を利用することが出来る。今年も発掘調査が予定されているので、火山防災の研究者・調査者・県市町村の防災担当者はぜひ現地を見学し、防災対策検討の材料にして欲しい。

現地調査に際しては、山北町教育委員会生涯学習課町史編さん班の池谷栄さんに大変お世話になった。

今までの調査結果を踏まえ、土砂災害の状況と復興への努力をさらに調査・検証して行きたい。